

あとがき

本書全体を振り返り、この論集が、『戦後思想の再審判』という大仰なタイトルにふさわしい問題提起をなしえているかどうか、読者の判断を俟つしかない。しかし、限られた時間のなかで、現時点での最善を尽くしたという思いは存在している。

本書の企画は、二〇一四年春の日本平和学会での法律文化社の上田哲平さんと大井との出会いを契機に始まり、以後、四人の編者で企画内容を練り上げ、対象思想家を選定したうえで、問題意識を共有する若手・中堅研究者に広く執筆を呼びかけて成りたつたものである。

その後、二〇一五年二月に東京、三月に名古屋で構想報告会を開き、全執筆者に論文構想を発表してもらった。各報告をめぐる率直な議論は、丸一日続いた報告会ではもちろんのこと、酒席に移動しても延々と続いた。また原稿提出後も、五月に立教大学で編者全員と上田さんとで原稿検討会を行い、すべての章に対して忌憚らない意見を出し合い、執筆者に必要な変更を要請して、各章の問題提起が可能な限り明晰な表現で読者に届けられるよう、努力を重ねた。それらの過程は、学問における相互研鑽の機会であったと同時に、それぞれの「戦後思想」への態度決定や、学問と現実との関係をめぐる熱い議論の場となり、かけがえのない時間となった。

戦後七〇年を迎え、現下の論壇や学問、そして政治的現実に対して危惧や批判意識を持ちながら、「戦後思想の再審判」を通して、われわれの視点からその肯定的遺産を掘り出したいという思いが、少なくとも編者四人のあい

だで共有されていたことは事実である。したがって、この論集は、同時代から遊離した学問研究報告でも、「価値中立的」な思想史研究でもなく、一定の「立場性」を自覚している。それは編者の自負であると同時に、まさにそれゆえ、本書が読者の側からの批判的視点にとりわけ強く曝されなければならない理由でもあろう。

遺された課題も少なくない。当初収録予定であった加藤周一論と藤田省三論は諸般の事情で残念ながら掲載できなかった。マルクス主義、沖縄、フェミニズム、戦後日本の朝鮮史研究については、独立した章として取り上げることはできず、コラムというかたちで触れるにとどまっている。また、本書で取り上げた論者とは毛色を異にする戦後思想家たち——たとえば林健太郎、福田恆存、高坂正堯、江藤淳など——の検討なども、今後の課題の一つといえよう。

本書の完成は多くの人の協力に負っている。成田龍一先生と宇野重規先生には、本書を温かく見守り、帯に推薦を寄せていただいた。そして何より、法律文化社の上田哲平さんは、若手・中堅研究者による問題提起の重要性を理解し、一貫して本書の執筆者と伴走することで、われわれを勇気づけていただいた。その意気に応えようという意志が、執筆者を支え、本書を実現させたといえる。記して深く感謝したい。

二〇一五年七月一六日

編者を代表して 大井 赤亥